

フィルターバブル論の精神分析的観点からの 解釈の可能性

—パーソナライゼーションの問題を中心として—

萩原 優騎*

A Possibility of an Interpretation of the Filter Bubble Theory from the Viewpoint of Psychoanalysis: Focusing on Personalization Problems

Yuki Hagiwara

Abstract

The public in contemporary society is networked. People live in an environment where ICT (Information and Communication Technology) has developed and spread. Eli Pariser proposed the filter bubble theory, focusing on the filter functions of algorithms to consider the impacts of ICT on the ideas and behaviors of people. This paper aims to interpret his theory from the viewpoint of psychoanalysis. This approach will enable us to deepen our understanding of personalization problems.

It is said that many people assume search engines are unbiased. Pariser doubts this belief and claims that search engines may be increasingly biased to share their views in the era of personalization. Democracy requires people to see things from one another's point of view, but they are enclosed in their filter bubbles, Pariser says. They are offered parallel but separate universes. This can be one of the leading causes of social division undermining the public.

Pariser refers to research on curiosity in psychology by George Loewenstein. Loewenstein explains that awareness of an information gap is a necessary precondition for experiencing curiosity. This is a gap between what one knows and what he/she wants to know. Pariser points out that one feels curiosity when he/she is conscious that something is being hidden. However, he/she will not be compelled to learn about what he/she does not know if the filter bubble hides things invisibly.

* 東京海洋大学学術研究院海洋政策文化学部門准教授
国際基督教大学社会科学研究所研究員・教養学部非常勤講師

This explanation focuses on the character of personal recognition, but it is also necessary to analyze the relationship between people and society for our deeper understanding of personalization problems. A psychoanalytic perspective, especially the one based on Lacanian psychoanalysis, shows how personal recognition is linked to others and society. According to Jacques Lacan, a symbolic order based on language assures the stability of the ego as the imaginary. Both the symbolic and the imaginary aspects of a psychoanalytic subject come from others. An infant imitates others, which is acquiring language and developing his/her ego.

The subject must be oriented toward the idealized other as the object of identification. He/she assumes that the idealized other should know what he/she wants to know, which is called metastases. This shows that the gap between what one knows and what he/she wants to know as a driving force is tinged with otherness. However, the desire to know what he/she wants to know will be eliminated easily if he/she uses search engines. He/she can satisfy his/her desire without shaping an identity based on metastases to the idealized other. He/she will not actively pursue what he/she wants to know any longer in such a situation.

The filter bubble can promote this trend. Pariser defines personalization as building an environment that consists entirely of the adjacent unknown, which will not shake one's schemata but feel like new information. This tendency also means a crisis of the public because it can bring about the fragmentation of society and the polarization of social groups. As a result, one loses the opportunity to meet others who may know what he/she never knows. He/she avoids reconsidering fundamentally his/her symbolic axis forming his/her perspective, which is an essential matter of psychoanalysis.

I. はじめに

情報通信技術（ICT：Information and Communication Technology）が発達し普及した現代社会においては、「プライバシー（privacy）」という概念に関わる多くの問題が生じている。こうした事態を十分かつ適切に理解するためには、それぞれの場面の個別的な文脈を考慮に入れる必要があることを、萩原（2023b）では若者たちのSNS（Social Networking Service）を用いたコミュニケーションに関わる各種の事例を参照して論じた。このような現状は最先端の技術のみによって作り出されているのではない。技術に関わる制度や価値、そしてそれらの諸要素の相互関係にも着目して、

問題を捉える必要がある。また、情報通信技術が活用される場面にはどのような力が作用し、それがどのような影響を及ぼしているのかという点も視野に入れなければならない。こうした問題意識に基づいて、本稿では「フィルターバブル (filter bubble)」という概念に注目し、ウェブ環境における「パーソナライゼーション (personalization)」の問題を中心に精神分析の観点からの検討を試みる。従来、パーソナライゼーションの問題は、情報通信技術のもたらす社会的影響を主題とした、社会学などの領域における論考にて扱われる傾向があった。一方、そうした論考にて扱われる事柄に関連する論点の一部は、精神分析の領域においても異なる文脈にて論じられてきた。両者を視野に入れ、認識主体の成立や変容の条件に焦点を合わせた精神分析の観点からパーソナライゼーションに関わる問いを捉え直すことにより、問題をより深く掘り下げたり従来とは異なる角度から光を当てたりすることが可能になるはずである。

はじめに、本稿の考察の前提として、萩原 (2023b) でも扱った、情報通信技術が発達し普及した現代社会における公共性の問題が本稿の問題関心とどのように関わっているのかという点と、本稿のキーワードである「フィルターバブル」という概念の定義を確認する。次に、フィルターバブルをめぐる諸問題を論じる。フィルターバブルの作用とは具体的にどのようなものであるのかということ、それをを用いる企業の影響と責任が主たる検討課題である。あわせて、精神分析的な考察のための予備的作業として、フィルターバブルのもたらし得る影響に関係する論点を扱った心理学的な研究を参照する。続いて、精神分析の観点からのフィルターバブル論の解釈を試みる。本稿で扱う精神分析の観点がどのようなものであるのかということを概説した上で、その観点から前章までに見てきた事柄を捉え直す。そして、現状において直面している困難の所在と、その背景に存在すると考えられる状況について論じる。最後に、これまでの考察を通じて見えてきた点と残された課題を示す。

II. 考察の前提

1. ネットワーク化された公共をめぐる議論

現代社会では、情報通信技術は人々の日常生活における多くの場面で使用されている。それらの技術に関わる議論は必ずしも一般化し得ないこと、すなわち、個々の場面の文脈を視野に入れて諸問題を検討する必要があることを、萩原 (2023b) では若者たちによる SNS の利用を通じたコミュニケーションを事例として論じた。その際

に主に参照したのは、10代の若者たちを対象として、SNSの利用に関わる各種の事例研究を展開してきたダナ・ボイド（danah boyd）による考察である。SNSの利用を通じて展開されるコミュニケーション及びその在り方を、ボイドは「ネットワーク化された公共（networked publics）」と表現する。それは、ネットワーク化された技術によって再構成された公共、人々と技術と行為とが交差した結果として出現する想像上のコミュニティである（boyd, 2014, p.8=2014, p.20）⁽¹⁾。この定義においては、「公共」という概念が二つの側面において捉えられている。第一に、「空間」に関わる側面である。それは、先行する世代の若者にとってのショッピングモールや公園といった空間が有していたのと同様の機能である（boyd, 2014, p.9=2014, p.21）。第二に、「イメージ」に関わる側面である。それは、かつての若者たちがマスメディアを通じてつながっていると感ずることができたように、集合的な想像の共同体の一部として自らを思い描くことである（boyd, 2014, p.10=2014, pp.21-22）。ただし、若者たちの日常生活はこのようなオンラインコミュニケーションに限定されるわけではない。ネットワーク化された公共によって生み出されたメディアを介した文脈と、学校において構築されたメディアを介さない文脈を含む、異なる社会的文脈を若者たちは移動しつつ、それぞれ異なったやり方で社会的力学を操る（boyd, 2014, p.39=2014, p.63）。

ボイドの主たる関心は、世間の様々なバイアスに抗して若者たちのコミュニケーションの実態を可能な限り正確に記述しようとすることにある。そのような意図に基づく研究を展開するに当たって、ボイドは自身の研究における考察の対象と範囲を限定している。すなわち、アメリカ社会とソーシャルメディアの発展を支える資本主義の論理をとりあえず受け入れるということであり、そうした前提は批判されるべきだとしても、そのことは当該の研究の範囲を超えているという（boyd, 2014, p.43=2014, p.27）。資本主義の論理はネットワーク化された公共の在り方にも影響を及ぼしている。ネットワーク化された公共においては、若者たちとその痕跡はしばしば商業的利益のために利用される、すなわちオンラインマーケティングの対象であると、ボイドは指摘する（boyd, 2014, p.202=2014, p.331）。こうした状況は、若者たちによるコミュニケーションが展開される際の前提として位置づけられる。ソーシャルメディアによって提供される空間とコミュニティは、たとえそれが理想的ではないとしても、若者たちが公的生活へのアクセスを求めるに際して利用可能なものである（boyd, 2014,

(1) 邦訳のある文献からの引用に際しては、訳語を適宜改めた。

p.203=2014, p.332)⁽²⁾。このような理由から、ネットワーク化された公共は、若者たちにある種の自由を提供していると思なすことができるというのが、ボイドの認識である。

もちろん、ソーシャルメディアの利用は政治と無縁ではない。ネットワーク化された公共は本質的に政治的公共圏というわけではないにしても、オンラインでの活動に政治を持ち込み、政治的であるために技術を用いる若者たちも存在する (boyd, 2014, p.206=2014, p.338)。そのように述べて、ボイドは具体例を列挙している。それゆえ、ネットワーク化された公共は政治性を排除するものではない。その説明においてボイドは、ジョディ・ディーン (Jodi Dean) による先行研究に言及し、自身の定義と比較する。ネットワーク化された公共は、その商業性ゆえに政治的な公共圏としての役割を果たすことができないとディーンは判断するかもしれないが、それは理想的なものではないとしても政治的な動きは多く生じていると、ボイドは考える (boyd, 2014, p.243=2014, app. p.158)⁽³⁾。両者の議論は、その出発点に存在する認識や主たる関心事項が大きく異なる。ディーンによると、公共圏という概念はネットに適用され得ないばかりか、情報をめぐる資本主義の条件下では民主主義的实践を害するものでもあるという (Dean, 2003, p.95)。ディーンの議論は、民主主義に基づく政治の在り方や、民主主義的な諸実践が現状において直面している困難の所在に焦点を合わせている。その結果として、情報通信技術やウェブ環境に関する視点や評価も、ボイドとは異なったものとなっていると考えられる。

2. フィルターバブルとは

以上のように、ボイドはネットワーク化された公共においても政治性は存在すると主張する。それどころか、自身が考察する意味での「公共」についての問いを、社会における政治的な諸課題をめぐる議論にも深く関係するものとして位置づけている。その最たる例として挙げられているのが、パーソナライゼーションの問題である。検

(2) ボイドの認識の背景には、日本とはある程度異なるアメリカ社会の事情が存在する。アメリカでは、公園やショッピングモールなどの公共の場に集まって遊ぶことや、通学以外の目的で公共交通機関を利用すること、徒歩や自転車通勤することなどが禁止されている場合も多く、それゆえに若者たちは SNS を利用して友達とのコミュニケーションを積極的にとろうとするという (boyd, 2014, pp.86-90=2014, pp.139-145)。

(3) boyd (2014) の邦訳では、原注と引用文献一覧が巻末付録として掲載されており、本文とは異なるページ番号が付されている。

索エンジンから得られる結果がますます高度にパーソナライズされるようになると、異なる人々の間で異なる結果が得られるという、情報検索における差異が生じる (boyd, 2014, p.186=2014, pp.303-304)。ボイドはこうした事態が若者に及ぼし得る影響を指摘する。グーグル (Google) をはじめとする検索エンジンは情報の質を形作るが、検索結果がどのように産出されるかという点や、自分たちの見るものへのパーソナライゼーションの影響を、若者たちは必ずしも十分には気づいていないという (boyd, 2014, p.186=2014, p.304) ⁽⁴⁾。こうした傾向の背景の一つとして、情報通信技術の利用に関するリテラシーの問題が存在すると考えられる。若者たちは自身がアクセスする情報の質を批判的に評価することを教わらないため、何が価値のあるものなのかということを決めようとした時に、検索結果を当たり前のものと見なしてしまう (boyd, 2014, p.186=2014, p.305)。

パーソナライゼーションがもたらす問題に批判的な論者の一人としてボイドが言及しているのが、イーライ・パリサー (Eli Pariser) である。パリサーの主張をボイドは次のように要約する。「パーソナライゼーションを行うアルゴリズムは、インフォームドパブリックを創出する能力を衰退させる社会的分離を生み出す」 (boyd, 2014, p.186=2014, p.304)。パリサーは、パーソナライゼーションに関わる様々な論点とその諸側面を論じているが、情報の検索をめぐる問題を議論の中心に位置づけている。検索結果として得られるのは当人に最適であるとアルゴリズムが提案するものであり、別の人物であれば全く異なった結果となっているかもしれない (Pariser, 2011, p.2=2016, p.14) ⁽⁵⁾。しかし、こうした事態は人々によって十分に認識されているとは限らない。つまり、各自が検索結果として得ているものは、当人が気づいているか否かはともかく、既にパーソナライズされたものであるかもしれない。このことは民主主義の危機でも

(4) ボイドが行ったインタビュー調査では、若者たちが検索エンジンを無批判に信頼しているという傾向が見られた。例えば、ある若者は「もしグーグルで検索できないならば、それは存在しない」と述べ、その友人も「グーグルは全てを知っている」と答えたという (boyd, 2014, p.186=2014, p.304)。

(5) この点に関して、パリサーは具体例を示している (Pariser, 2011, pp.2-3=2016, p.14)。2010年の春、メキシコ湾にあるBP社の石油採掘施設での爆発事故に由来する原油流出の影響がまだ残っている時期に、二人の友人に「BP」と検索してもらった。両者はアメリカ北東部に住み、教育レベルにおいても、白人の左派女性であるという点でも、かなり共通している。しかし、両者の検索結果は大きく異なっていた。一人の検索結果の最初のページに表示されていたのはBPに関する投資情報だったが、もう一人の場合は流出事故に関するニュースだったという。

あるという。事実の共有に基づく信頼を民主主義は要求するが、私たちには並行しているが分離された世界が提示されている (Pariser, 2011, p.5=2016, pp.17-18)。これは、上述したポイドによるパリサーの議論の要約において、「社会的分離」と言い表されていた事態の一側面であろう。そのことをパリサーは次のようにも表現している。互いの視点から物事を見ることを民主主義は人々に要求するが、私たちはますます自らのバブルに包まれるようになっていく (Pariser, 2011, p.5=2016, p.17)。

インターネットを利用する際に人々が閲覧している内容は、ますますパーソナライズされていく。そのことが、ここではバブルという比喻で論じられている。こうした傾向を作り出している装置が予測エンジンである。予測エンジンは、当人の好みを推測することによって、その人が誰であり、次に何をしようとしていて何を望んでいるのかといった仮説を不断に構築し改良する (Pariser, 2011, p.9=2016, p.23)。このようにして、パーソナライゼーションの精度が高まっていく。その結果、予測エンジンは各自に固有な情報宇宙を作り出すのであり、アイデアや情報に人々が接する形式を根本的に変える (Pariser, 2011, p.9=2016, p.23)。パリサーはこの情報宇宙を「フィルターバブル」と名づけた。続いて、フィルターバブルの出現に伴って生じた三つの特徴と、それらがもたらす問題が示される (Pariser, 2011, pp.9-10=2016, pp.23-24)。第一に、フィルターバブル内での孤立である。情報の共有が経験の共有の基盤である時代において、それは人々を引き裂く遠心力として機能する。第二に、フィルターバブルは目に見えないということである。検索エンジンによる自身に対する想定が正しいかということの人々は分からないばかりか、そもそもそうした想定がなされていることさえ分かっていないかもしれない。第三に、バブルに入ることを当人が選ぶのではないということである。パーソナライズされたフィルターを自ら選択したわけでもないのに、そのような条件がいつの間にか与えられている。これらの諸特徴は人々の生活に多大な影響をもたらす。それは、広告を仕切るアルゴリズムが私たちの人生を仕切るようになり始めているということである (Pariser, 2011, p.9=2016, p.23)。

Ⅲ. パーソナライゼーションの諸問題とその論点

1. フィルターバブルの作用

パリサーによると、フィルターバブルはレンズのようなものである。すなわち、見るものと見ないものをより分けることで、人々が経験する世界を知らないうちに変えてしまう (Pariser, 2011, p.82=2016, p.117)。このことを、パリサーは「歪みの効果

(distorting effect)」と形容している。それは、フィルターバブルが人々の精神活動と外的環境との相互関係に干渉するということであり、人々が接する範囲を制限し、考え方や学び方に影響を与える (Pariser, 2011, pp.82-83=2016, p.117)。その結果、既知に知っていることと新たに学ぶこととのバランスがとれていない状態が生じ得る。第一に、既知に知っていることの比重が高まる。フィルターバブルは人々が既になじみのある、そして賛同済みのアイディアで取り囲むことによって、観念的な枠組みに対して自信過剰にしてしまう (Pariser, 2011, p.84=2016, p.118)。第二に、新たに学ぶことの比重が低下する。フィルターバブルは、人々が学びたいと思うようになる重要な動機を環境から取り除いてしまうからである (Pariser, 2011, p.84=2016, p.118)。もちろん、フィルターバブルが存在しない環境ならば、新たに学ぶことへと人々は常に意欲的に動機づけられているかという、そうではないだろう。世界に対する自身の考え方に適合する情報を摂取することは容易で楽しいが、新たな思考様式を要求したり、自身の仮定を疑問に付したりするような情報を摂取することは苛立たしく、困難でもある (Pariser, 2011, p.88=2016, p.123)。このような傾向がフィルターバブルによって助長されると、パリサーは考える。そして、フィルターバブルに包まれた人々が現状を疑うことなく、ウェブサイトの閲覧を続けるならば、その傾向をより強化することになる。クリックによって構築される情報環境は、既存の観念を支持するコンテンツを、それに抵触するものよりも優遇するからである (Pariser, 2011, p.88=2016, p.123)。

上述の傾向については、ボイドもフィルターバブルとの関連において指摘している。例えば、ユーザーが長期間にわたって特定の政治的立場のニュースソースをクリックし続けるならば、当人の政治的見解に合致した検索結果しか示されなくなるかもしれない、既存の政治的な溝はさらに深くなる (boyd, 2014, p.186=2014, p.304)。こうした事態が人々に必ずしも自覚されていないとすれば、それはなぜだろうか。理由の一つとして考えられるのは、検索エンジンの機能や特徴について、人々が明確に認識しているとは限らないことである⁽⁶⁾。ボイドによるインタビュー調査では、多くの若者、

(6) 人々の認識が正確であるとは限らないというのは、検索エンジンに関してだけではない。例えば、ボイドが行ったインタビュー調査では、グーグルとウィキペディア (Wikipedia) に対する若者の認識の違いが顕著に見られた (boyd, 2014, p.183=2014, p.299)。若者たちは、ウィキペディアに書かれていることは「本当ではない」と聞かされているゆえ、「本当のこと」を探したい時にはグーグルを使うという。このような回答の背景にあったのは、教師たちからの影響だった。「誰でも編集できるゆえに、ウィキペディアには正確ではない情報があふれている。情報を検索する時にはグーグルを使うように」と、教師たちは勧めていた。

親、教師がグーグルに対する絶大な信頼を表明したという。彼らはグーグルを信頼できる情報源として理解しており、旧来のニュースソースとは違ってグーグルは中立的であると信じていた(boyd, 2014, p.184=2014, pp.301-302)。ただし、そうした信頼は、具体的な根拠に裏付けられたものではない。アルゴリズムには編集者のような偏りはないに違いないと、人々は素朴に思い込んでいる(boyd, 2014, p.185=2014, p.302)。また、検索結果の完全な「中立性」や「制御」を実現することも想定しがたい。第一に、アルゴリズムはインプットに基づいて進化していくゆえに、検索エンジンの設計や開発に携わる人々も、アルゴリズムによる決定の全てに責任を負うことはできない(boyd, 2014, p.185=2014, p.302)。ただし、そのように述べたとしても、設計や開発に関わるあらゆる責任が免除されるわけではないだろう。第二に、アルゴリズムの調整を図る過程そのものが、以下のように中立性の実現を不可能にしている(boyd, 2014, p.185=2014, p.303)。検索結果の改善を図る際には、「正しい」答え、あるいは少なくとも「適切な」答えがあるはずだとエンジニアが信じる質問でテストする。それは、あらゆる段階に人間とそのバイアスが含まれるということである。どのデータでシステムを訓練するのか、どの分類が重要なのか、どの事例をテストすべきなのかといったことが選択される。これらは実に「人間的」な決定であり、エンジニアが自身のバイアスを除去することは不可能であると、ボイドは述べている(boyd, 2014, p.185=2014, p.303)。

2. 企業の影響力と責任

上述のように、検索結果の中立性や制御の完全な実現は不可能であることを、ボイドは強調している。一方、パリサーの場合、アルゴリズムに関わる論点を扱いながら、その強調点がボイドとはやや異なる。パリサーが問題視するのは、政策などの場面への技術の適用において、恣意的な操作がなされ得るということである。つまり、コードがどのように書かれているのか、それが何を処理しているのかといった点には、社会的価値が埋め込まれている(Pariser, 2011, p.227=2016, p.308)⁽⁷⁾。この埋め込みが恣意

(7) その例として、選挙区割りの方法をめぐる論点が挙げられている(Pariser, 2011, p.228=2016, p.308)。特定の政党が有利になるように水面下でなされる駆け引きという問題があり、選挙区割りソフトウェアに行わせるべきだと提唱されてきた。しかし、それによって根本的な問題が解消されるわけではない。対象となるグループを都市にするのか、民族集団にするのか、自然境界にするのかといったことが、どの政党が議席を獲得するかということを決定づけ得るからである。

的になされ、そしてそれを行った者の思惑通りに事態が進展した場合、「中立性」とは正反対の結果がもたらされることは言うまでもない。こうした状況を改善していくためには人々のリテラシーの向上が必要であると、パリサーは考える。アルゴリズムの基礎的な教育により、システムがどのように働くのか、どこで誤りが生じ得るのかといったことが分かるようになる (Pariser, 2011, p.228=2016, pp.308-309)。ただし、それだけでは十分ではなく、より根本的な変革が求められるという。すなわち、人々が自らの行動を変えるだけでなく、パーソナライゼーションを推進する企業も変わらなければ、効果は限定的である (Pariser, 2011, p.229=2016, p.309)。この主張において、パリサーは企業に課された責任を強調している。具体的には、フィルタリングシステムの公衆に対する透明性の向上が重要であるとされる。アルゴリズムの過程は企業秘密であると主張することによって、外部から決定が見えにくくなるゆえに、この主張はアカウントビリティから企業を保護する (Pariser, 2011, pp.229-230=2016, pp.310-311)。

パリサーがこれらの議論を展開する際に主に念頭に置いているのは、グーグルである。その規模や影響力が極めて大きいゆえに、それに伴って問われるべき責任も大きくなると、パリサーは考える。この点について特に批判的な議論を展開しているのが、パリサーも引用しているシヴァ・ヴァイディアナサン (Siva Vaidhyanathan) である。何が重要で、妥当で、真実なのかということの決定を、今や人々はグーグルに対して認めているのであり、情報生態系を理解するための価値、方法、過程の管理を放棄してしまった (Vaidhyanathan, 2011, p.xi =2012, p.12)。こうした状況を、ヴァイディアナサンは「グーグル化 (Googlization)」と名づけた。物事に対する評価や認識にグーグルは影響を及ぼしているのであり、人々は自らの認識にグーグルのインターフェースと構造を織り込んでいる (Vaidhyanathan, 2011, p.7=2012, p.21)。このような現状において考慮すべき問題の一つとして、ヴァイディアナサンもフィルターの影響を指摘する。私たちが誰であり、何を知っているかといったことが検索結果に反映されることで、同じ事柄についてそれぞれ異なった理解を有する別々のコミュニティに分断されるという (Vaidhyanathan, 2011, p.184=2012, p.249)。これは、フィルターバブルに包まれることにより、既存の政治的な溝はさらに深くなっていくと、ボイドが述べていたことに重なる。そして、グーグルの影響はさらに強まっていくだろうと、ヴァイディアナサンは予測する。グーグルは、私たちが定期的に利用する、最も順応性があり、なおかつ最も強力な情報フィルターであり、決定や価値判断に法外な影響を及ぼし得ると述べている (Vaidhyanathan, 2011, p.200=2012, p.271)。

3. 好奇心に関する研究

以上にて、フィルターバブルの作用としてのパーソナライゼーションの特徴と、それを生み出す企業の影響力及び責任に関する、各論者の考察を概説した。これらの議論においては、パーソナライゼーションの進展により、社会的にも深刻な事態がもたらされ得ることが示唆されていた。しかし、個人と社会の関係とはどのようなものであるのかという点は、必ずしも明示されていなかった。この点をより掘り下げて論じるには、個人に対する影響について、また、その影響に伴って個人の認識に生じ得る変化について、社会との関係において捉えることのできる視点が必要となる。本稿では、そうした視座を提供するものとして精神分析を位置づける。ただし、その意義をより正確に把握するためには、個人の認識をめぐる問題がフィルターバブルに関する考察においてどのように示されているのかということ、より詳しく見ておく必要があるだろう。そこで、パリサーが心理学の視点を参照して、個人の認識に関わる問題を検討している箇所を取り上げる。

ジョージ・ローエンスタイン (George Loewenstein) による、好奇心 (curiosity) を主題とした心理学の研究に、パリサーは言及している。ただし、パリサーはローエンスタインの論考の要点をごく簡潔に紹介するにとどまっている。本稿の問題関心の関連でこの議論を扱うには、主要な論点をより詳しく見ておく必要があるだろう。ローエンスタインは、心理学の領域における好奇心に関する研究の歴史を振り返り、主要な研究成果を比較検討している。その上で、それらの先行研究の観点を統合し得るものとして、「情報ギャップ (information gap)」に焦点を合わせた自身の理論を提唱する。情報ギャップとは、「知っていること」と「知りたいこと」とのギャップである (Loewenstein, 1994, p.87)。「知っていること」に満足している状態では、知的欲求は生じない。しかし、当人の「知りたいこと」の水準が、その時点で当人が「知っていること」を上回る時、好奇心が生じる (Loewenstein, 1994, p.87)。こうした変化は、情報ギャップの認識においてもたらされる。情報ギャップは欠乏感を生み出すのであり、それを減らす、もしくはなくすために、自身に欠如している情報を獲得しようという動機づけが働く (Loewenstein, 1994, p.87)⁽⁸⁾。ただし、人々は常に好奇

(8) この過程は一度限りではない。なぜなら、新たな情報によって自身の情報量に対する感覚は変わり得るからであり、そのようにして「知りたいこと」に関する水準の変化がもたらされる (Loewenstein, 1994, p.89)。こうして、好奇心は再び駆動される。新たな情報は、知るべきことについての絶えず変化していく動機を生じさせる (Loewenstein, 1994, p.89)。

心に駆られているかということ、そうではない。「知らない」ということを認識しこなうならば、それは好奇心に対する障壁となり得る (Loewenstein, 1994, p.91)。それゆえ、こうした状況を変化させ得る条件を問うことが重要となる。人々が「知らない」ということを認識するための一つの方法は、適切なフィードバックを受け取ることである (Loewenstein, 1994, p.91)。それは、自身の認識に対する反省的な視点をもたらし得るからである。誤りを指摘された場合、情報ギャップの無視や否定は困難であり、そうしたフィードバックなしには、人々は自身の認識を正しいと信じてしまい、好奇心が失われる (Loewenstein, 1994, p.91)。

ローエンスタインによる以上の見解に基づいて、パリサーはフィルターバブルがもたらし得る問題を指摘する。その際、ヴァイディアナサンとの接続が試みられている。ヴァイディアナサンによると、検索結果がよりカスタマイズされるほど、予期せぬもの、未知なもの、なじみのないもの、不快なものに遭遇しにくくなっていくという (Vaidhyathan, 2011, p.183=2012, p.249)。ただし、フィルターバブルによって、未知な要素が完全に除去されるわけではない。パーソナライズされた環境は、自身が抱いている疑問への解答には大変適しているが、全く視野に入っていない疑問や課題の提示には適していない (Pariser, 2011, p.91=2016, p.127)。そのことは、政治の領域においても深刻な問題をもたらし得るといえる。一例として、政党支持者は、自身のイデオロギー的信条を裏付けるニュースソースを消費する傾向が高いとされる (Chait, 2010) ⁽⁹⁾。こうした傾向が、フィルターバブルの出現以前から存在していたことは、パリサーも認めている。バブル内においては、自身の知っていることを正しいと確信させるコンテンツの割合が非常に高まる (Pariser, 2011, p.89=2016, pp.124-125)。つまり、フィルターバブルは、上述の傾向を著しく助長する。そして、完全にフィルタリングが行われた世界においては、予期せぬ出来事やつながりという驚きが失われ、学びが触発されにくくなるだろう (Pariser, 2011, p.91=2016, p.127)。こうして、フィルターバブルの影響下では、ローエンスタインが述べていた、好奇心が駆動され得る条件が大きく損なわれる。

(9) パリサーが引用した Chait (2010) は、アメリカにおける各政党の支持者に対する調査の結果について記した Bartels (2008) を、その主張の典拠として挙げている。

IV. 精神分析的観点からの解釈

1. 自我の形成過程

ローエンスタインの研究ならびにそれを参照したパリサーの主張においては、好奇心が駆動される、あるいはそれが阻害される条件が、個人の認識に焦点を合わせて論じられていた。一方、精神分析の視点においては、個人の認識とは他者性を帯びたものであること、つまり、集団や社会との関連において初めて成立するものであることが強調されている。本稿で主に扱うジャック・ラカン (Jacques Lacan) の精神分析理論を中核に据えたラカン派の視点においては、そうした傾向が特に顕著である。一般的に、個人が周囲の他者及び環境と関わりを持つ時、当人は自身に対して、周囲の他者及び環境に対して、そして自身と他者及び環境との関係に対して、何らかの意味づけを行っていると考えられる。換言すれば、それらの関係は意味の世界における認識活動に基づいて展開されている。そのことを、言語や法に関わる「象徴界」あるいは「象徴的なもの」(the symbolic) と、自我意識に関わる「想像界」あるいは「想像的なもの」(the imaginary) という、認識活動における異なる側面間の関係において、ラカンは捉えている⁽¹⁰⁾。掟の仲介によって社会的に定義されるという人間存在間の象徴的繋がりによって、想像的なものは統御されるという (Lacan, 1975, p.222=1991a, p.226)。つまり、認識主体の想像的な自我は、象徴的秩序に参入することにおいて、その社会的な位置づけがなされるということである。象徴的な水準とは、人間間の言語的交流によって具現されるものであると、ラカンは定義している (Lacan, 1975, p.224=1991a, p.227)。この定義に示されているように、象徴界は個人に閉じたものではない。認識主体は間主体的な関係の中で象徴化され、意味の世界の一部に自身を位置づける。自身や周囲に対するイメージとしての意味の世界の安定性は、言語の獲得を通じて認識主体の自我が象徴的に統御されることによって実現する。

ラカン派の視点では、象徴界だけでなく、想像界も他者性を帯びている。認識主体の自我は生まれながらに確固たるものとして存在するのではなく、また、ひとりでに形成されていくものでもない。自我は鏡像 (mirror image) としての性質を有すると、ラカンは説明する。鏡像的な相互関係において、幼児は自身の像をそれと認める (Lacan, 1994, p.17=2006a, p.11)。つまり、鏡に映った自身の姿を認識するかのよう、

(10) 厳密に言えば、象徴界及び想像界の作用のみによって、意味の世界が成立するのではない。意味の世界とは、その破れ目としての「現実界」あるいは「現実的なもの」(the real) との関連においてのみ定義され得るものである。

幼児は周囲の他者を模倣しながら自我を形成していく。この鏡像は、自己のイメージとしての「理想自我 (ego-ideal)」である。主体はそれを他者の中に、世界を理解する枠組みとして見出す (Lacan, 1975, p.311=1991b, p.199)。ただし、自他の鏡像的な関係によってだけでは、自我の形成は促されない。想像的な関係に加えて、象徴的な次元が導入される必要がある。これを、ラカンは「自我理想 (ideal-ego)」と呼ぶ。自我理想とは、鏡像的な同一化を十分に満足のようにする視点を支えるものであり、主体がそこから自分を見るようになる点である (Lacan, 1973, p.241=2000, p.361)。鏡の前に立った幼児が、そこに映った自身の姿を見ている。その背後から親が鏡像を指し示すならば、自身の姿に対する幼児の認識は促されるだろう。言語の獲得に伴って象徴化の能力が増し、自我の形成が促進されていくことを、ラカンはこのような比喩を用いて説明している。

上述した自我の形成過程では、主体は自身が未だ実現するに至っていない理想に方向づけられている⁽¹¹⁾。こうした方向づけを、櫻村愛子は「転移 (metastasis)」と表現する。転移とは、主体が理想的なものとしての他者に方向づけられることであり、それは自己変容の支えとなる (櫻村, 1998, p.7)。これは、幼児期の自我の形成過程のみに当てはまるのではない。幼児は他者に力の審級を措定し、この他者に依存しつつ成長するが、大人になっても理想的なものの設定があることによって、それに向けての努力が可能となる (櫻村, 1998, p.7)。櫻村による説明は、この概念を広い意味で定義したものと言えるだろう。狭い意味での定義とは、精神分析の実践において、主体が自らの抱える困難の所在やその解決策といった「知」を分析家に求めるということである。どちらの定義にも共通しているのは、主体が手に入れたい十全性を体現した他者との関係が重要な位置を占めていることである。そうした他者との関係において、主体は一方では現実認識を他者に仮託しつつ、他方で他者が導く理想へと自己を変容させていく (櫻村, 1998, p.7)。ローエンスタインの論考においては、心理学の様々な学説が参照され、好奇心が駆動される条件としての内的要因や外的要因に関する諸理論や、それらの相互の関係が詳細に検討されている。しかし、要因が内的で

(11) このような理想への方向づけは他者性を帯びているという点で、自己啓発セミナーやそれに類するものの場合とは異なる。自己啓発セミナーにおいては、理想の対象となるのは他者ではなく自己であり、現時点では何らかの障害によって未だ完全な自己を実現するには至っていないとされる (櫻村, 1998, p.33)。そこには、完全な自己という到達目標やその内実を批判的に再検討する余地が存在しない。

あれ外的であれ、あるいは「知っていること」と「知りたいこと」とのギャップであれ、それらはいずれも個人の認識とその変容の条件に焦点を合わせた説明となっている。それに対し、ラカン派の視点では、個人の認識それ自体が他者性を帯びていること、「知っていること」と「知りたいこと」とのギャップに由来する「知」への方向づけもまた、他者の存在に由来することが示唆されている。

2. 転移の空間

「知っていること」と「知りたいこと」のギャップの認識に伴う学習の動機づけに関して、教育に期待される効果という観点から榎村は説明している。転移の機能を考慮に入れた場合、教育の場面での教師と学習者との関係が重要な論点となる。榎村によると、両者の関係において教師に期待され得るのは、幻想を与える能力である（榎村, 2009, p.299）。この幻想は、先述した他者において体現される十全性に関するものである。教師が何らかの部分知を供与した時、それを通して学習者はその背後に全体知のイメージを投射する（榎村, 2009, p.299）。このように、学ぶことへの動機づけは、幻想に支えられて機能すると考えられる。すなわち、現状において「知っていること」が未だ十分ではないという認識が成立するならば、知るべきことがまだ存在するという、「知りたいこと」への動機づけが働く余地が生まれる。それは、「新しいことが分かるかもしれない」という期待であり、転移とは、全てが今すぐに分かることを留保し、それを習得しようとする時間を生み出す空間である（榎村, 2009, p.300）。ところが、教育の具体的な場面では、このような空間が常に成立するとは限らない。例えば、受験に合格することだけを目的として、効率よく「正解」を学ぶことを目指す教育が実際には広く行われてきた。こうした教育においては、「知りたいこと」への動機づけは作用しがたいだろう。

一方で、単に効率的な学習を追求するのは異なった教育の可能性を模索する動きも存在してきた。榎村が挙げている一例が、ヘンリー・A・ジルー（Henry A. Giroux）の教育論である。ジルーは「境界（border）」をキーワードとして、教育という営みを批判的に考察している。境界とは、歴史、権力、差異の言語を構造化する認識論的、政治的、社会的周辺に対する認識を示すものである（Giroux, 1992, p.28）。境界に目を向けることは、「越境（border crossing）」の可能性を生じさせる。すなわち、境界とは、越境の一形式としての文化批判や教育過程を予示するもの、換言すれば、既存の境界への挑戦と再定義を可能にする侵犯の形式を示すものである（Giroux,

1992, p.28)。このような境界に対する認識に基づいて、教育の在り方が構想される。既存の権力構造内での新たなアイデンティティの創造を可能にする「境界地 (borderland)」を生み出すために、学習者が「越境者 (border crosser)」になるための条件の創出が必要であるという (Giroux, 1992, p.28)。その実践を可能にするものとして、「境界教育学 (border pedagogy)」が提唱される。それは、特定の権威の形式の保持において、権力と知識との関係はどのように作用しているのかという点の理解に関わるものである (Giroux, 1992, p.29)。

ジルーによると、教育とは単に知識を伝達するということではない。既存の境界に挑み、新たなものを創出することを意図して、異なる文化的コード、経験、言語を構成する多様な参照項目に関わる機会を、境界教育学は学習者に提供する (Giroux, 1992, p.29)。このようなジルーの試みを、先述した「転移」に関する精神分析的観点から捉え直す可能性を、榎村は示している。その際に注目するのは、ジルーが自らの課題を公共性との関連で位置づけていることである。学校とは公的生活に向けて学習者を教育する機関であり、市民的勇気を形作る知識、気質、道徳的ビジョンを備えさせる機能を果たすべきであるという (Giroux, 1992, p.18)。榎村の理解では、公共性は個人と社会の「媒介領域 (mediation)」としての側面を持つ。それは、現実との関係を一旦は留保し、自由なやりとりや試行錯誤を可能にするものである (榎村, 2009, p.294)。ジルーの構想に、こうした媒介領域としての意義を見出すことができるのではないかという。すなわち、教師を含めた成員が、自らのアイデンティティを形成している文化的境界を括弧に入れる留保の領域として、教育の場を捉え得る (榎村, 2009, p.294)。境界の「侵犯」という表現からも分かるように、ジルーの構想は、既存の枠組みを問い直し、その再配置を試みるものである。ただし、問題は、そのような実践のための空間の形成が現代においては必ずしも容易ではなくなっていることである。

3. 現代社会の状況とその困難

媒介領域が担保されることで、認識主体の試行錯誤が可能になる。それは、現状から一旦は距離をとり、直面する困難に向き合うために必要となる時間の猶予を与える。ところが、現代社会においては、こうした媒介領域が成立しがたくなっている。媒介領域は新たな意味を生み出す想像的な領域であるが、その成立には精神分析的な意味での象徴や他者を必要とする (榎村, 2009, p.295)。先述の通り、想像界は象徴的な

統御によって安定性が維持され得る。この安定性は、主体が未だ実現に至っていない理想を体現する他者に方向づけられることにおいて成り立つ。ところが、情報通信技術の発達と普及に伴って、情報の量も速度も著しく増している状況下では、「知っていること」と「知りたいこと」との間のギャップに由来する知への欲望は、即座に満たされてしまいがちである⁽¹²⁾。インターネットでの検索によって直ちに「最適解」や「あらゆる情報」が得られると錯覚されるならば、「新しいことが分かるかもしれない」という期待や、「全てが今すぐに分かること」の留保が働く余地はほとんどない。それは、これまで不可能もしくは困難だった欲望の満足を科学技術が次々に実現することで、欲望充足の絶え間ない連鎖を引き起こしているという事態である（立木、2013, p.124）。

フィルターバブルはこのような傾向を助長し得る。好奇心が生じるには何かが隠されていると意識していなければならないが、フィルターバブルは物事をいつの間にか隠してしまうゆえ、私たちは自分が知らないことを学ぶ必要性をあまり感じなくなる（Pariser, 2011, p.91=2016, p.126）。もちろん、学習に関わる要素が全て失われるわけではないだろう。パーソナライゼーションとは、すぐ手の届く所にある未知、すなわち、私たちのスキーマを根本的には揺さぶることのない新しい情報だけで環境を構築することである（Pariser, 2011, p.91=2016, p.127）。換言すれば、根本的な未知はそこから排除される。こうして、知への欲望が喚起されがたい状況にフィルターバブルが拍車をかける。自らが既にある程度知っていること以外には人々の関心が向きにくいとすれば、ヴァイディアナサンがフィルターの影響について指摘していた、各自が「知っていること」に基づくコミュニティの分断という事態が生じやすくなる。学びとは他者及びその他者性との根本的な遭遇であるが、フィルターは検索者をその可能性から遮蔽する（Vaidhyanathan, 2011, p.182=2012, p.247）⁽¹³⁾。

- (12) 情報の量も速度も著しく増している状況は、社会の「再帰性（reflexivity）」の増大と表現できる。それは、社会の営みが、当該の営みに関して新たに得た情報によって常に吟味され、その結果、営み自体の特性を本質的に変えていくことである（Giddens, 1990, p.38=1993, p.55）。この論点については、萩原（2023a）で詳述した。
- (13) ここでヴァイディアナサンが用いている「他者」という概念には、精神分析的な文脈での定義と重なる部分もあるとはいえ、両者は同一ではない。異なる社会や文化に属する他者との関わりにおいて、自らの意味の世界が問い直されることがある。この場合、自身の認識を規定してきた象徴化の在り方が疑問に付され、意味の世界の破れ目としての現実界に遭遇し得る。ただし、異質な他者との遭遇が、常にこのような経験をもたらすとは限らない。むしろ、他者を否定的に評価したり憎悪の対象としたりすることで、既存の認識が強化されることもある。

フィルターバブルによるパーソナライゼーションがコミュニティの分断を促し得ることは、アイデンティティの形成という論点の検討を通じて、より明確になる。パーソナライゼーションは、主として次の三つの段階から成るとされる。最初に「どうい
う人で何を好むかということを把握する」、次に「当人に最も合致するコンテンツとサー
ビスを提供する」、そして「ぴったり適合するように調整する」(Pariser, 2011,
p.112=2016, p.155)。ここに二つの側面を見出すことができる。第一に、アイデンティ
ティがメディアを形作るということであり、第二に、メディアがアイデンティティを
形作るということである (Pariser, 2011, p.112=2016, p.155)。パリサーが強調してい
るのは、第二の側面である。すなわち、人とメディアがぴったりな関係になるように、
人の方を変えてしまう (Pariser, 2011, p.112=2016, p.155)。こうした状況においてメ
ディアによって形作られるのは、「知りたいこと」への方向づけの乏しいアイデンティ
ティである。自我の形成過程において、主体は自らが未だ実現するに至っていない理
想を体現する存在として他者を位置づけていた。主体がこのような他者と同一化する
時、その関係は想像的であり、そこには理想化と攻撃性の両面性が存在する (Lacan,
1994, p.220 =2006b, p.31)。主体が手に入れることのできていない十全性を所有する
と想定された他者は、憧憬や尊敬の対象となるならば主体の転移を促すが、そうでな
い場合には憎悪や嫉妬の対象として攻撃性が向けられる。

理想への方向づけが乏しく、象徴的な統御の不十分な主体にとっては、十全性を体
現する他者は憧憬の対象ではない。反対に、自身の十全性への到達を阻んでいる、も
しくは十全性を不当に所持している存在という、憎悪や嫉妬の対象である。そのよ
うな他者は、自身の安定したアイデンティティの形成を妨げる障害として主体に認識さ
れる。このことは、キャス・R・サンスティーン (Cass R. Sunstein) が社会の「断片
化 (fragmentation)」とそれに伴う集団の「分極化 (polarization)」と表現した事態
に深く関わる。各自がフィルターに包まれた状況下では、人々は根本的な未知を排除
し、既存の知識や自身の主義主張に合致する見解を追い求めがちである。その結果、
異質な他者を認識から排除し、自らの現時点での認識を補強する主義主張を有する者
同士の集団が形成されていく傾向が強まる。そこでは、ジルーが構想したような、自
身のアイデンティティを再検討する試みが実践され得る可能性は著しく低下するだろ
う。それどころか、当人の主義主張と合致しない異質な集団は、自身のアイデンティ
ティを乱す存在として認識され、それらに対する攻撃性が発揮されやすくなる。こ
うして、成員がほぼ内輪でやりとりする集団がそれぞれ形成されると、その相互理解は

困難になるのであり、憎悪や暴力を生み出すような仕方では集団が分極化していく (Sunstein, 2017, p.57=2018, p.78)。分断された諸集団間の関係において、自らが属する集団以外に対して憎悪や暴力が向けられる傾向にあるのは、主体のアイデンティティが理想へと方向づけられたものではなく、象徴的な統御が不十分であり、他者に対する攻撃性が発揮されやすくなるからである。

V. おわりに

以上において、フィルターバブルをめぐる諸問題とそれに関わる社会状況を、認識主体の構造に焦点を合わせて精神分析の観点から解釈することを試みた。ローエンスタインによる研究等を参照して心理学的な観点からフィルターバブルのもたらす影響を記述する場合、個人の認識が集団や社会とどのように関係しているのかということは、主題になりがたい。本稿では精神分析的な観点から記述することにより、この点に関する理解を深めることができたと考えられる。認識主体の象徴的な側面も想像的な側面も、いずれも他者との関係に基づいて成立しているものであり、主体の認識それ自体が他者性を帯びている。そして、現代社会においては、主体の象徴的な側面よりも、想像的な側面が前面化しやすくなっている。それは、科学技術の発達と普及によって欲望の充足が容易になったことを背景として、未だ到達できていない理想への方向づけという契機が乏しくなり、象徴的な統御を伴った自我の形成が十分になされなくても済む状況が実現しているからである。インターネットでの検索によって即座に「正しい」答えが得られると想定された環境は、まさにその例である。フィルターバブルはこうした傾向を助長し得る。フィルターバブルに包まれた状況下では、現時点で「知っていること」を根本的には脅かさない範囲でのみ、「知りたいこと」が探求される。一方、精神分析における主体は、転移を媒介として「知」を追い求めた末に、自らの認識及びその方向づけの役割を果たしてきた理想の限界への直面を契機として、それらを規定している象徴的座標軸そのものを問い直そうとする。フィルターバブルに包まれた主体が回避し続けるのは、精神分析におけるこの本質的な課題との直面にほかならない。

最後に、残されたいくつかの課題に触れておきたい。第一に、本稿ではパリサーによる議論を考察の前提に位置づけたゆえに、フィルターバブル論に対する批判や異論を扱うことはできなかった。それらも視野に入れることで、さらなる考察が可能になるだろう。第二に、本稿ではパリサーの主張とその周辺に焦点を合わせたゆえに、フィ

ルターバブルに類する概念や関連する理論との比較を十分に行うことはできなかった⁽¹⁴⁾。それらの定義、観点、力点等の異同を問うことで、議論をより深めていくことができるはずである。第三に、本稿の主題に即して考察の範囲を限定した結果として、ポイドが公共性を論じる際に自らの主張と対比していたディーンの見解に関しては、検討の対象とすることができなかった。なお、ポイドがディーンに言及した箇所では触れられていないが、ディーンは精神分析の領域の論考も参照しながら、公共性に関する議論を展開している。本稿での精神分析的な観点からの考察に基づいてディーンの見解を捉え直すことで、新たな発見がもたらされる可能性もあるかもしれない。これらの課題とその重要性を確認し、本稿を閉じる。

(14) 例えばサンスティーンは、情報の選別とそれに伴う不要なものの遮断が実現された環境について論じている。また、バリサーやヴァイディアナサンは、サンスティーンの見解にも言及している。しかし、本稿ではバリサーの議論を中心に扱い、それとの関連でヴァイディアナサンの論考を取り上げた。そのため、サンスティーンの見解の詳細や、それがバリサーやヴァイディアナサンの認識とどのような点で共通し、どのような点で異なっているのかといった点には立ち入ることができなかった。

参考文献

- Bartels, L. M. (2008, August). The irrational electorate: Many of our worst fears about America's voters are true. *The Wilson Quarterly*, 44-50.
http://archive.wilsonquarterly.com/sites/default/files/articles/WQ_VOL32_A_2008_Article_05_1.pdf
- boyd, d. (2014). *It's complicated: The social lives of networked teens*. Yale University Press. ((2014)『つながりっぱなしの日常を生きる——ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』野中モモ (訳)、草思社。)
- Chait, J. (2010, August 27). *How republicans learn that Obama is Muslim*. The New Republic.
<https://newrepublic.com/article/77260/how-republicans-learn-obama-muslim>
- Dean, J. (2003). Why the net is not a public sphere. *Constellations*, 10(1), 95-112.
- Giddens, A. (1990). *The consequences of modernity*. Stanford University Press. ((1993)『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏 (訳)、而立書房。)
- Giroux, H. A. (1992). *Border crossings: Cultural workers and the politics of education*. Routledge.
- Loewenstein, G. (1994). The psychology of curiosity: A review and reinterpretation. *Psychological Bulletin*, 116(1), 75-98.
- Pariser, E. (2011). *The filter bubble: What the internet is hiding from you*. Penguin Books. ((2016)『フィルターバブル——インターネットが隠していること』井口耕二 (訳)、早川書房。)
- Sunstein, C. R. (2017). *#republic: Divided democracy in the age of social media*. Princeton University Press. ((2018)『#リパブリック——インターネットは民主主義になにをもたらすのか』伊達尚美 (訳)、勁草書房。)
- Vaidhyanathan, S. (2011). *The Googolization of everything: And why we should worry*. University of California Press. ((2012)『グーグル化の見えざる代償——ウェブ・書籍・知識・記憶の変容』久保儀明 (訳)、インプレスジャパン。)
- Lacan, J. (1973). *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*. Seuil. ((2000)『精神分析の四基本概念』小出浩之他 (訳)、岩波書店。)
- Lacan, J. (1975). *Les écrits techniques de Freud*. Seuil. ((1991a)『フロイトの技法論 上』小出浩之他 (訳)、岩波書店；(1991b)『フロイトの技法論 下』小出浩之他 (訳)、岩波書店。)
- Lacan, J. (1994). *La relation d'objet*. Seuil. ((2006a)『対象関係 上』小出浩之他 (訳)、岩波書店；(2006b)『対象関係 下』小出浩之他 (訳)、岩波書店。)
- 樫村愛子 (1998)『ラカン派社会学入門——現代社会の危機における臨床社会学』世織書房。
- 樫村愛子 (2009)『臨床社会学ならこう考える——生き延びるための理論と実践』青土社。
- 立木康介 (2013)『露出せよ、と現代文明は言う——「心の闇」の喪失と精神分析』河出書房新社。
- 萩原優騎 (2023a)「社会リテラシーとしての再帰的近代化論——情報倫理学の社会的文脈への理解を深めるために」『東京海洋大学研究報告』19、15-31。
- 萩原優騎 (2023b)「プライバシーの文脈の多元性と情報倫理の関係——SNSを用いたコミュニケーションに関する課題を中心として」『社会科学ジャーナル』90、77-98。

